

道南いさりび鉄道

素材研究
(国内)



車窓には津軽海峡の景観が広がります



1896年に外国人修道士らが創設した「トラビスト修道院」(北斗市)



昨年12月には「貝鮮焼 北斗フィッシャリー」がオープン(北斗市)



オランダで造られた威風丸が眠るサラキ岬のチューリップ(木古内町)



木古内駅前にある道の駅「みそぎの郷きこない」は観光コンシェルジュも常駐



フルーツレインを彷彿させる「ながまれ号」の外観

ゆつたりと旅情感じる旅の提案を 地元産の食材を活用した観光列車も

新青森／新函館北斗間の開業により、今年3月からスタートした北海道新幹線。函館をはじめ道南地域への注目が集まる中、旧・江差線を守る「道南いさりび鉄道」は、地域に密着した運営で沿線地域の観光振興に取り組んでいます。

身近な鉄道経営で地域の人々と連携

今年3月26日、北海道新幹線の開業にともなう、JR北海道の旧・江差線(五稜郭／木古内≒37・8キロ)区間で、北海道・函館市北斗市木古内町などが株主となっている第3セクターの「道南いさりび鉄道」が運行を開始しました。

道南いさりび鉄道経営企画部営業課の勝又康郎課長は、「身近な鉄道経営により、地元と一体となって沿線地域の活性化に貢献したい」と語り、特に、観光面で地元の人々との連携を重視する方針を示しています。

「地域の皆さんの生き生きとした姿を見ていただくことも、観光の一つの原点。無人駅を地域の皆さんに活用していただくなど、観光振興や路線維持のためにも、地元への力は必要不可欠です」(勝又課長)

昨年11月には、地元自治体や住民などが利用促進協議会「道南いさりび鉄道地域応援隊」を設立。応援隊では、各駅でのポス

トカードやグッズの配布、列車を歓迎する手旗振りなどを実施しているほか、有志がメッセージを書き込んだ紙を駅舎に掲出するなど、お祝いムードを盛り上げています。

新幹線にはないスローな旅の楽しみ

道南いさりび鉄道では開業と同時に、地域情報発信列車「ながまれ号」の運行も開始。「ながまれ」はもともと青森や岩手など東北地方の言葉で、「ゆつくりして」「のんびりして」という意味で道南地域でも古くから使われている方言です。通常の運行に加え、団体にテーブルやヘッドレストを備えた特別仕様の観光列車としても利用されることになっています。

すでに、日本旅行が商品造成、サービス提供を行う日本で初の形態で「ながまれ海峽号」を運行することも決定、地元産の食材を使った「北海道で唯一の供食を伴う観光列車」として注目されています。

テーブルに道南杉を使用した内装の車窓からは、日没後に函館山のシルエットや函館市街地の夜景、津軽海峡の漁火も楽しめ、懐かしい車内と新幹線では味わえない函館湾の景観は、大きな魅力となりそうです。

勝又課長は、「北海道新幹線の開業によつて、北関東や東北など本州との距離も縮まり、旅行会社には、新幹線だけでなくスローな旅の楽しみ方もお客様にご提案いただきたい」と呼びかけています。